

日本文学研究資料叢書

歷史物語  
II

有 精 堂

日本文学研究資料叢書

# 歴史物語

Ⅱ

今鏡・水鏡・増鏡  
秋津島物語

日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書

歴史物語Ⅱ

---

---

昭和48年7月20日発行

編者 日本文学研究資料刊行会

発行者 有精堂出版株式会社

代表者 山崎 誠

発行所 有精堂出版株式会社

東京都千代田区神田神保町1-39

電話 03(291)1521~3番

郵便番号 101

---

---

山之内印刷

3393-550636-8610

# 目次

『古事記』から『増鏡』へ	岡 一男	一
日本の文学史に於ける歴史文学	津田左右吉	三
莊園所有者Ⅱ貴族の歴史—『増鏡』『水鏡』『大鏡』—	伊豆公夫	三
今鏡		
『今鏡新註』解題	関根 正直	四
中世初期における今鏡本文の考察	山内益次郎	四
今鏡作者攷	山口 康助	五
今鏡の成立年時について	加納 重文	七
今鏡人名考注	増淵 勝一	八
今鏡の文学論—「つくり物語のゆくへ」を中心にして—	則保 洋栄	三
今鏡と末法思想	原田 隆吉	一〇〇
今鏡粗描	佐藤 謙三	一〇九
今鏡系図	根本 敬三	一一八

水鏡

水鏡と扶桑略記、水鏡の価値を論ず……………喜田貞吉…一三〇

『水鏡詳解』解題……………江見清風…一三〇

水鏡の書名・巻数・著者等に就いて……………西岡虎之助…一四〇

『水鏡』解題……………尾上八郎…一五〇

擬古文学 水鏡……………野村八良…一五〇

水鏡の成立と扶桑略記……………平田俊春…一六〇

『水鏡』はしがき……………築瀬一雄…一六〇

秋津島物語

桂宮本「秋津島物語」―解説と本文―……………沼沢龍雄…一六三

増鏡

『増鏡』解説……………岡一男…一三五

増鏡の成立に関する一考察―舞御覽記との関係について……………平田俊春…一三六

増鏡作者論……………石田吉貞…一三七

一知識人としての『増鏡』の作者のありかた……………手島靖生…一三九

増鏡の性格……………石井順子…一四〇

増鏡の史実性について……………中村直勝…一四三

増鏡の構想と叙述	……………	木藤才藏	…三七〇
増鏡作者の創作意識に関する考察	—和歌と文章との関連—	武井啓子	…三六一
増鏡における王朝的なるもの	—その昂揚と頽廢—	金子大麓	…三六六
	*		
解説	……………	増淵勝一	…元三
歴史物語Ⅱ研究参考文献	……………		…三一

# 『古事記』から『増鏡』へ

岡 一 男

## 一、歴史文学のはじまりと流れ

現在我々に残されている日本の歴史文学のいちばん古いものは、八世紀初頭の『古事記』であろう。もともと『日本書紀』によると、履中天皇の四年(四〇〇)に始めて諸国に国史を置き、言事を記して四方の志を達せしむとあるのは、諸国に書記官を置き、地方の情報を中央にいたさしめたということに過ぎないが、最近熊本県玉名郡江田村船山古墳から出た太刀の銘に「治天下瓊 齒大王世云々」とあって、これが反正天皇(四六六—四七二)の御代をさすことがわかったので、当時すでにこんな僻地まで文字が流布していたことが知られたわけである。その頃官府には、応神朝に來朝した阿直岐・王仁の子孫が史官として仕え、前者を阿直岐史、後者を書首と称したが、のち倭の漢直の祖の阿知使主の一族が帰化するに及び、これを東史部といひ、王仁の子孫は、西史部といつて記録を掌るとともに、朝野に漢字・漢文をひろめた。また、そのほかに王辰爾の裔の船史部も種々の公文書を掌っていた。

そして推古天皇の二十八年(六〇〇)には、聖徳太子が大臣の蘇我馬

子と議して、天皇記及び国記、臣・連・伴造・国造・百八十部ならびに公・民等の本記を録せしめられたというが、これは皇極天皇四年(六四四)の蘇我氏滅亡のときに焼け、国記だけを船史恵尺が取り出し、この乱の主謀者であった中大兄皇子(天智天皇)に献じた。その後、天武天皇の九年(六八〇)三月、川島皇子ら十二人に命じて帝紀及び上古の諸事を記定せしむべく勅命があつたが、事が進捗せず、天皇は当時二十八歳の青年舎人であつた稗田阿礼を召して、勅語の帝紀・旧辞を誦習させられた。しかし、まだ撰録にいたらずして崩ぜられたので、元明天皇がその遺志を継承されて、和銅四年九月十八日に太安万侶に勅して、稗田阿礼の誦するところの勅語の旧辞を撰録させ、安万侶は翌和銅五年(七三三)正月二十八日業を終えて、これを献上したのが、『古事記』上中下三卷である。この時の上表文が『古事記』の序文として今日に伝えられているが、それによつて本書の勅撰の趣旨と成立の由来とがよくわかる。

## 二、帝紀と旧辞

それによると、「智海浩翰」としてふかく上古を探り、心鏡燦煌とし

て明らかに先代を親<sup>か</sup>たまうた天武天皇が、壬申の乱に勝利してご即位までもなく「諸家のもたるころの帝紀及び本辞、すでに正実に違ひ、多く虚偽を加ふる」を軫念<sup>しんねん</sup>あらせられて、「人となり聡明にして、目に度<sup>た</sup>れば口に誦み、耳に払<sup>た</sup>るれば心にするす」と称せられた若き博覧強記の舍人稗田阿礼を助手として、宮廷に伝来した帝紀や、蘇我の乱に危く焼け残った国記を底本として、官府や諸家のもたる帝皇日継や先代の旧辞を討覈<sup>たうかく</sup>して、そのもつとも純正であると思し召された古代の伝承を口授しておかれたものを、元明天皇の詔によつて安万侶が仔細に撰録して奉つたことであるが、その際、安万侶は阿礼の誦するところを細大もらさず録し、かつ漢字の音訓をたくみにもちいて古代伝承の筆受に遺憾なきを期したのである。そして擬漢文体ではあるが、できるだけ古語、しかも古音でよむことができるように、上代特殊音からアクセントまで漢字で表記するようになったわけである。

もちろん、その内容は天地初発から推古天皇までで、しかも、そのうち旧辞とみなすべき部分は神代から顕宗天皇までで、他は帝皇日継、あるいは帝紀であるから、その原形である帝紀は推古朝、旧辞は六世紀の継体・欽明の朝にはすでに成立していたものと考えられている。そのうち帝紀はご歴代の天皇の登極・崩御の際に必ず奏上されたもので、これを日嗣とも略称されていた。もとは口承に出たが、のち記録されるようになり、欽明天皇の頃には幾代か書きつがれた「帝王本紀」ができており、それが『上宮聖徳法王帝説』にも引かれ、さらに正倉院文書目録などにも「帝紀」二巻など見えている。これは『古事記』で見ると、ご歴代の系譜・皇居・山陵などを漢文体で簡記したものが、これになつてその前に付され

た神統譜には神話的な観想が祝詞的な修辞で表現されていて、すこぶる文学的である。また「帝紀」も誦習されて来たもので「保元物語」「平治物語」「平家物語」などの合戦の場にみる武士たちの名乗りの先駆をなすものとして面白く、いちがいに非文学的で煩雑だとも言えない。

また、旧辞は主として古代の神話・伝説で、神統譜とともに古代の巫女・語部の伝承からえたもので、安万侶はこれを本教とか、先聖によつてえたといつておるが、皇祖神とされている天照大御神も、神話学者によると、ヤマト国家の最高の女司祭であつたらしく、その神懸・托宣によつて天地初発以来の神話が伝えられ、これがわが民族の歴史の発展してゆく根本イデーと見られたのである。そして、その大綱としては、(1)宇宙開闢、(2)神祇の出頭、(3)国土の生成、(4)神武天皇の肇国、(5)成務天皇の国郡制定、(6)允恭天皇の氏姓正撰、その他崇神天皇の敬神・仁徳天皇の愛民など、宗教・政治上の事項があげられるが、本文を読むと、(5)以下のかたくなるしいことは要所々々にちよつと出て来るだけで、大方は神話・伝説・民話・歌謡でしめられ、中には頗るメルヘン的、あるいは劇的なものがある。文学趣味がはなはだ豊かである。

これは天武天皇の壬申の乱及び『万葉集』において見らるる如き英雄的詩人のご稟質によるのであるが、民俗学者の所説によれば、ご幼名大海人皇子は御乳母の実家が大海宿弥雲蒲<sup>あらしな</sup>から出で、古代の大きな芸能氏族であるアマの伝承にもご幼少から通じておられたのもよるらしい。また、壬申の乱にはつぶさに深刻な悲劇的体験をあげられるとともに、天照大御神や神武天皇の御霊の神助をもえられ、大和から兵を起し、大和に都を復せられて、古代神話の再生をおんみずから実地に演出してしまわれたのである。天皇即位後、



御窟殿をお建てになり、信優・歌舞を見そなわしたというのは、やはり天岩戸神話を劇化したもの、すなわち神楽をご覧になったかと思ふ。こういう天皇のご信仰やご好尚が、神代から宮廷の鎮魂の儀式や神楽の奏上や大嘗会における前行などを奉仕して来、中臣氏・斎部氏と相並んで、あるいはそれ以上に勢力があった五部神の一人であるアメノウズメの命の子孫の、猿女君氏の裨田阿礼、及び綏靖天皇の皇兄の神八井耳命以来神祇の家として知られており、後世神楽の人長となる伶人を代々出した太氏の安万侶のごとき大和の旧族の者を親昵せしめられるようになったのも所以なしとしない。

それに壬申の乱に天皇の軍には終始舎人が活躍していたことが知られているが、その中でも和邇部君手・調連淡海・安斗宿禰智徳などは日記を残し、文筆にもすぐれていたことを示しているが、安万侶の父の多品治、柿本人麻呂の父の猿などは壬申の功臣であり、丸邇臣・春日臣・大宅臣・粟田臣・小野臣・柿本臣など、いずれもその系譜が『古事記』に見えているが、孝昭天皇の皇子の天足彦国押人命から出ていて、カタリゴトやウタの伝承・管理で著名な氏族である。また、天武天皇の『古事記』勅撰のご動機には、氏族制度を改革して、これら功臣たちの家格を高めようという配慮もはたらいていたので、これらの氏族の伝承も採摭してあり、単に宮廷の古伝承ばかりでなく、それから分化・発展して行った民間説話も大いに撰取り、統合して、天地初発から推古天皇までの渾然として偉大な古代叙事詩を創作され、先代旧辞の精神を再生されたのである。こうして古代の氏族国家と新しい律令国家の統一をこの帝紀と旧辞の統合によってもたらそうとされたわけであるが、いまだ撰録に及ばずして天皇は崩せられた。そこでたぶん阿礼は故里の裨田に引退し、その誦習した旧辞を人々に聴かせていたのであろうが、その影響は

人麻呂の長歌にもあらわれて天下を聳動し、やがて元明天皇の叡聞にも入り、太安万侶をして、阿礼の誦する勅語の旧辞を撰録・奏上させられるようになったのであろう。

### 三、『古事記』の文芸性

その上巻は天地初発にはじまり、日向ご三代のウガヤフキアヘズの命の物語でおわるが、舞台は高天原・出雲・大和・筑紫・黄泉国とひろく、イザナギ・イザナミ両神の国土生成や、アマテラス大神の天の岩屋戸ごもり、スサノヲの命のオロチ退治、大国主命と稲葉の白兎、ニギの命のタカチホの峰への降臨、ウミサチ・ヤマサチの兄弟争いから、ヒコホデミの命の海宮訪問、ウガヤフキアヘズの命のご生誕の物語など、旧約聖書やギリシヤ神話を讀むと同じような文学的感動をあたえる。中巻は神武天皇から応神天皇までで、神武天皇の創業や、ヤマトタケルの命のクマソ・エゾ討伐、オキナガタラシヒメの命のシラギ討征など建国時代の英雄伝説で、西欧シッドの譚詩やニュールンゲンンの伝説を連想させる雄大さがある。下巻は仁徳天皇から推古天皇までで、メトリの女王とハヤブサワケの命の悲恋、マユワ王の復讐譚、オケ王・ヲケ王の流謫の話など、宮廷の権力や恋愛をめぐっての悲劇を主題とした歌物語になっていて、我々にワグネルの歌劇やシェークスピアの戯曲を連想させる高度の芸術性をもっている。

そこで『古事記』の序文には皇室中心主義による国民の氏族の統合という政治的意図がはつきり読み取れるのに、それにこだわらない神話・伝説・歌謡がたくさん含まれていて、相当多様な文芸性をもち、日本文芸の発生や発達をたどるのに不可欠の作品になっている。

## 四、歴史文学の文芸的地盤

しかし、『古事記』はあくまでフルコトブミ、すなわち歴史の書としての意識で著作されている。フルコトは、「経ル事」——すなわち歴史をさすとともに、「古語」をもさし、旧辞・旧事・旧語などとも書かれ、本辞ともよばれたことがある。それは単に古語で旧事を表現した書物というのではなく、現在の国家・社会の由来、もつとところ、経過して来たところを、原初から物語るものである。それは元来律語でかたられ、寿詞や祝詞として種々の祭儀で誦出されたり、神語(歌)・天語(歌)として大嘗会などに奏上されたり、久米舞・牟人舞として宮中の肆宴や饗礼に上演されたりしたものである。なお、中央・地方の豪族の氏々家々には、それぞれ伝承された説話があり、それらは氏文・家牒・纂記などとして官府の修史局に徴されており、また楽府では宮廷および民間の歌舞を管理していたから、旧辞の材料はいくらもあり、それが六世紀においてすでに集大成されていたのを、天武天皇が帝皇日継と統合されたのであるが、両書とも異本がいくらもあり、異体文字や変態漢文で表記されていたから、訓読しがたく、その上誤写や後人の意改があったので、稗田阿礼に誦習させ、天皇おん親ら削偽定実してゆかれたのだが、その際天皇の偉大な古伝尊重と英雄的芸術家精神が強くはたらいて、『古事記』を立派な文芸作品としたのである。それとともにその国語愛護のご精神は、近江朝の詩賦の流行に代わって人麻呂を中心とする和歌の興隆、持統朝の撰善言司の設置、文武朝における宣命——従来の漢文の詔勅にかわる国語の詔書の創始となつたのである。

ところが、この古語尊重の、平易な擬漢文体で書かれた史書は、

中国の『史記』などに比すると、あまりに表現が素朴すぎ、それに壬申の乱に天武天皇方にみかした氏族ばかりがいやに精細にのっていることや、応神以来東西史部らの任じて来た歴代記録の無視などに異議・反感があつて、元正天皇養老四年(七〇〇)五月の舎人親王の『日本書紀』三十巻の編修奏上となつた。これには太安万侶も協力したのだが、純然たる中国風の漢文の本紀体・編年体の史書となり、内外の異伝や史料の参考すべきは皆引照し、神代から持統天皇まで記事も精細なのだが、典拠を中国に仰ぎ、文に修飾多く、ためにわが古意を失っている点があるのを惜しまれている。しかし、爾後わが国の正史はこれにならない、『統日本紀』『日本後紀』などいわずゆる六国史が出た。そうして、『古事記』の伝統は平安初期の『古語拾遺』や『先代旧事本紀』によつてほそほそと伝わつて来たのであるが、当時心ある人々は、『古語拾遺』の序文にあるように、「蓋聞、上古之世。未レ有、文字。貴賤老少。口々相伝」えていたのに、「書契以来。不レ好、談古。浮華競興。還嗤、旧老」を憤慨していたし、また嘉祥二年(六九三)三月仁明天皇の宝算四十の御賀に際して、奈良興福寺の大法師らの奉つた長歌は、日本国肇造からうたいあげた堂々たるものであるが、その中に「大御世を万び代祈り、仏にも申し上ぐる事の詞は、この国の本つことばにおひよつて、唐の詞をからず、書き記す博士雇はず、この国の言ひ伝ふらく、日の本の倭の国は、言霊のさきはふ国とぞ、古語に流れ来れる、神語に伝へ来れる、言へ来しことのまにまに、本の世のこと尋ねれば、歌詠に詠みかへして、神事にもちめ来れり、本の世によりしがひて、仏にも神にもあげのべて祈りしまことは、ねもごろと聞き召してむ……」(『統日本後紀』)と、大いにわが古語・国語のために万丈の氣焰を吐いたところがあり、必しも弘仁の唐文化謳歌に圧倒されてい

なかつた趣が見える。しかし、この歌に見るとおり、古代の神々より仏を尊しとする思想はあり、『先代旧事本紀』のごときも、推古天皇の勅によつて古記により聖徳太子が儒となり、釈説次録したものと成つており、その天皇記は、神武天皇から神功皇后までを天皇本紀とし、応神天皇から武烈天皇までを神皇本紀とし、継体天皇から推古天皇までを帝皇本紀とするなど、現時の新進史家の記批判と符節をあわせているが如き観があり、かつ聖徳太子をもつて帝皇紀の獲麟としているのだが、この古代の世界的視野をもつて帝皇ヒューマニストであり、フェミニストでもあつた哲人が回想されて来るところに、人麻呂らにみちびかれた万葉人とちがった平安朝人の新しい人間の理想像がうまれたと思う。

### 五、歴史物語文学の開花

ところで、十世紀以後、天皇親政の律令政治が衰え、撰関政治が勢いをえて来ると、——それにはむろん土地公有の班田経済から土地私有の荘園経済への社会的地盤の変動がともなつていたのだが、自然国史勅修のことがやみ、宮廷では『古今和歌集』などの和歌勅撰のことが相次いで行なわれ、私的には『竹取』『伊勢』『大和』『宇津保』『源氏』などの物語文学が時世粧を写すものとして簇出した。これは貞観頃から草仮名が一般化し、小野篁や六歌仙らによつて和歌が再興し、新時代の思想・感情を新しい国字で放胆に表現しうるようになったからだが、『宇津保物語』や『源氏物語』になると、数代の帝の御代にわたる時世粧と幾十人かの貴族の性格の種々相とその運命の浮沈を目観するがごとく精細に描いていて、これを大河小説とも、またフィクションをもちいた歴史小説ともよばばよばれるものであつた。これらの写実的長編小説は撰関政治の上昇期に誕

生したが故に、時代を過去に設定し、人物を仮作して、フィクションをもちいて現実を描いたのであつたが後三条天皇の即位となり、撰関政治が動揺して来ると、そのはなやかなりし時代を恋い忍ぶもの、またその得失を論ずる国文の史書——『栄花物語』『大鏡』が出現した。もつとも、これより先、撰関政治のピークに立つた御堂関白藤原道長が後一条天皇の万寿四年（三〇三）十二月に六十二歳で薨じたことは、当代人に大きな時代の変転を予感せしめたといえ、漢文の私撰の国史として、『日本紀略』（神代―後一条）及び院政の開始された堀河朝に仏教史観にもつづく『扶桑略記』（神武―寛治八年）の著があるが、両者とも六国史をついだものでなく、その抄録に宇多天皇以後の諸記録を編年したものすぎない。ところが『栄花物語』がその後に出でて、はじめて六国史につき、仮名の歴史物語の祖となつたのである。

いったい、『竹取物語』や『源氏物語』も、古代の旧辞の系統をひくもので、当時の社会や人物にたいする深刻な批判やビビッドで精彩な描写もあるのだが、そしてモデルや准拠はもちろんあるとしても、描かれた人物・事件は史実ではなく、仮構であつた。それを『栄花物語』は史実の世界にもつてゆき、『源氏物語』の手法・文体によつて、六国史のあとをつぎ、宇多天皇から堀河天皇の寛治六年（一〇九）に至るまでの約十五代二百年ほどのことを、撰関政治の頂点に立つて、位人臣を極めた御堂関白藤原道長の栄花を中心として、ほぼ編年的に四十巻に記述したものである。正統二編にわかれ、月宴から「鶴林」まで三十巻は、宇多天皇（八八）から後一条天皇の万寿五年（三〇三）までの事を叙し、道長一門の栄華とその由来を詳しく説き、続編の「殿上花見」から「紫野」までの十巻に長元三年（一〇三〇）から寛治六年（一〇六）までの道長没後の一門の歴史を概叙

している。古来正編を赤染衛門の著とし、続編を出羽弁や周防内侍らの作にあてる説が有力であるが、赤染衛門の目視したと思われる、あるいは彼女なら絶対にまちがいはないと思われる記述に、実に背いている重大な誤りはいくつかあるので、いちがいに従えない。出羽弁にたいしても明らかな反証がある。しかし、撰閔家の女房たちによって相当大掛かりな準備で企画され、編纂に着手され、書きつがれていったことは確かだろう。この正統のわけ方・巻名など、『源氏物語』のそれを模倣しているのである。そして宮廷・貴顕の権勢・恋愛についての秘話、公私の儀式・雅遊、法成寺などの仏事供養や寺社詣など、宮廷及び撰閔家謳歌の一边倒で、時世粧絵巻としても、当代貴族の心理描写としても多彩で、精細で、なかなか面白いが、刀伊の乱や院政などの国際的、あるいは内政上の重大事についてはふれていず、いったいに女房の物めで心理からの感傷性が強く、いわゆるすべらし文章で、冗長で退屈な巻々も少なくない。それに盛んに仏教教理を説き、『法華経』『往生要集』『白氏文集』などの美辞麗句を多く引き、和漢混淆文になっている箇所など、はなはだ生硬で不調和だが、これがのちに『保元物語』『平治物語』『平家物語』などの軍記物語の文体をうむのである。

## 六、『大鏡』の出現

ところが、鳥羽天皇の朝(二〇七—二二三)、白河院の院政時代に、この『栄花物語』に刺戟されて、院がわ・男性がわかからの撰閔政治批判の歴史物語として『大鏡』が著作された。内容は文徳天皇から後一条天皇までの百七十六年間の歴史を、やはり藤原道長の栄花・人物を主題として叙述・描写・論評している。登場人物は三百名にも上るが、十四代の天皇及び撰閔大臣のうち、主要なるものはとくに

精叙し、その面目を躍如させるとともに、その心術・性格にするどい批判を加えており、撰閔政治、とくに道長権勢の由来については、先祖の大織冠鎌足からして皇室との関係において詳しく考えており、藤原氏が他族を排し、同族相喰み、はては叔姪・兄弟血で血を洗う醜い争いをして空前の栄花をえた経路とカラクリが仮借なく暴露されている。

ところで『大鏡』は先出の『栄花物語』の源氏式・女性式・物語様式によらず、空海の『聲誓指揮』や『源氏物語』の「雨夜の品定」『堤中納言物語』の「このついで」などにならった問答体の劇的様式で、藤氏全盛の世を写しているが、先師五十嵐力博士はこの『大鏡』の文芸史的特徴を要約して、(1)老人の物語という点で、『古事記』などの旧辞の伝統を復活させ、(2)入興可読の連続興味を備え、栄花式の単調・退屈に陥らず、(3)支那の正史の紀伝体を参酌し、物語に出る人物を活躍させ、(4)全編を劇的対話の趣向で統一し、話し手・聞き手の風手や場面を絶えず読者の幻影に浮かばせ、(5)猿・雀・魂<sup>たまご</sup>を發揮し、滑稽味があり、(6)人物や事件の叙述が公平で、瓊瑤<sup>きんぎょ</sup>ともにあげ、気骨があり、(7)文章に無類の特色があり、変化に富み、美も力もあり、おそらく平安朝の文章の男性的なるものの一である」と評された(『大鏡研究』新潮社『日本文学講座』)。これは『大鏡』出現以来、それがうけた最高・最大の、そしてたぶん最も妥当な文学的批評だと思つので、この先師の卓見によりつつ、蛇足ではあるが、以下本書の構想や構成や文体や史観や、およびその文芸史、とくに歴史文学における地位について多少立ち入って論じてみたい。

## 七、『大鏡』の構想

まず、全編の構想を見ると、作者が万寿二年乙丑(二〇〇)五月、紫野の雲林院の菩提講に参詣し、そこで当年百九十歳だという大宅世継、百八十歳だという夏山繁樹とその老妻とが、三十歳ばかりの若侍と落ち合ひ、説法のはじまる前の退屈しのぎに、老の自慢に、世継の翁が、若侍たちを相手に昔話をするのを傍らで聴いていて、あとで筆記した形になっている。世継の翁がおもな語り手でシテ役、繁樹はその合榎をうったり、足らぬところを補なったりするツレ役、若侍も単なる聴き手でなく、恐ろしく学があり、歴史の裏面に通じていて、世継が綺麗事というのを、自分はこう聞いているがいつて逆襲し、翁たちを感心させる、立派なワキ役である。繁樹の老妻さえ、自分がかつて仕えていた中務の君の話をするのだから、万緑叢中紅一点というほどの風情はないにしろ、まず相当なトモ役である。その他、彼らの周囲には翁たちの話に聞き惚れる、そして時に口をさしはさむ、この菩提講参詣の聴衆が大勢いたことは言うまでもない。

ところで、この物語のなされた年を万寿二年としたのは、藤原道長が望月の欠くることなき極盛に達した年だからであり、五月の菩提講としたのは、この菩提講が、今年の三月二十五日に五十四歳で崩御された三条院皇后城子のご遺骸が四月四日に雲林院の西院に移されて(『左経記』)、どうもその七々忌の法会の初日か中日だったと思えるからである(西岡虎之助氏「大鏡の著作年代と其著者」『史学雑誌』昭二・七)。もしそうだとすると、その法会の日は五月十四日であり(『小右記』目録)、この皇后は後一条天皇立坊の儀姓となられた小一条院のご母后であるから、そこに『大鏡』の作者の深意がひそんでいないとは言えないが、『栄花物語』の「みねの月」によると、西院では七々忌のすむまで御念仏申すよう僧たちに

命ぜられ、ご法事は三条院であり、大内記菅原忠貞が御願文を作っている(『続本朝文粹』)。従って雲林院本堂である菩提講は、城子皇后といちおう関係なしに行なわれたかも知れない。

というのは、菩提講は転迷開悟のために『法華経』を講説する法会で、雲林院のは毎年五月にあり、『中右記』承徳二年(二〇六)五月一日の条に、

一条尼上、并寢殿御家方、令参雲林院菩提講、給、予為御共参入。講師登高座間、於三堂中西北廊一聴聞。講師院範、先授三帰十戒、次説経。人々所供養、已及数十部。寢殿御方、令供養名字功德品給。説法之間、誠以随喜。已時許事了。堂中並座老少男女、称南無二声、遍滿如雷。

とあり、更にその起原については、

此筵者、故源信僧都、為結縁二所レ被二如行一也。其後無縁聖人、行来日久、或有夢想告、行此講筵、或発菩提心、来於此堂舎、如レ此問、法会之趣、随レ及三末代、弥以繁昌歟。

とあるが、また佐藤球氏は「尚、今昔物語(巻十五、始雲林院菩提講)聖人往生語第廿二)に見えたる趣は、源信に非ずして、鎮西の盗人の後に悔悟入道して、此講を始めた由に記せり。或は、此に無縁聖人といへる、その人にや。詳かならず」といつておられるが(『大鏡詳解』)、源信といい、無縁聖人といい、貴賤をえらばない大衆的なもので、当日の老若男女群集したさまは、観るが如くである。従つて、この菩提講をば世継・繁樹ら老人を登場させる舞台としては、作者の文学的技巧の見るべきものがある。そこで表面は城子皇后の七々忌と関係なく幕ひらきをしており、師尹伝で彼女にふれても、「小一条の大将の御姫君ぞ、ただ今の皇后宮(城子)」と申しつるよ。三条院の御時に后に立て奉らむと思しける、こちよりては、

大納言の女めの后に立つ例なかりければ、御父の大納言を贈太政大臣になしてこそは、后に立てさせたまひてしか。されば、皇后宮いともめでたくおはしますめり」とと現にご生来のように記しており、また師輔伝の大斎院（選子内親王）の条に、この斎院が仏法を忌ませられなかつたことをいって、「近くはこの御寺の今日けふの講には、さだまりて布施をこそはおくらせたまふめれ」とまであるが、つひに娥子皇后の七々忌法会にはふれない。従つて作者は、今年の雲林院の菩提講をあくまで例年のしきたりとして扱っているのだが、それは失考ではなく、これだけはそらとぼけたのかも思う。今年の五月も半ばすぎると、道長は迦葉仏の転生だといふ閼寺の牛を拝みに行つたり、七月には赤斑瘡が大いに流行したり、その女で小一条院妃の寛子が薨じたりする。更に八月五日には、同じくその女で東宮妃の嬉子が皇子を生誕してまもなく薨ずるといふ風に、道長の全盛の世に暗いかげがさして来るから、万寿二年五月以後にはできない。といつて、この菩提講を娥子皇后七々忌中とすると、座がしめつて今の入道殿下の古今未曾有の栄花のめでたさについて長広舌を振うにふさわしくないからであろう。

なお、紫野の雲林院を話説の場所にえらんだのは、『大鏡』の間答体が『源氏物語』の「帚木」の巻のいわゆる雨夜の品定に由来し、世継の翁が自分の物語を「日本紀」に比しているのは、おのれをひそかに日本紀の御局とよばれた紫式部に擬しているの、後世ここが彼女の誕生地とか墓地とかにされたと同じような心理が、『大鏡』の作者にもはたらいたからであろう。また、ここに紫式部の墓とならんで、小野算の墓もあることを考えると、古代伝承の管理と伝播とで有名な小野氏の裔と称する巫祝の徒の棲んでいたからとも想像され、また『源氏物語』の「賢木」の巻には、光源氏が六十巻とい

う文をとかせて聞いたとあり、また『大鏡』がその時世粧批判の精神をうけついでと見られる、『竹取物語』の作者に擬せられる遍照僧正の棲んでいたこともある天台の名刹であり、また『栄花物語』の獲麟の巻が「紫野」であることも、後者について、その補訂批判の意図でこの書を著した作者に、何らかの示唆をあたえたことと思ふ。

『大鏡』の作者は、かく物語の時所位を決定するにも、鋭い歴史的眼光を炯々と輝かしていたのである。

## 八、「大鏡」の語り手たちの風采

つぎに、この物語のシテ役たる大宅世継のことを考えてみると、彼は清和天皇のご譲位の年である貞観十八年丙申（七七〇）正月十五日に生れた。ことし万寿二年（二〇三）百九十歳の老翁である。彼の父は大学寮のなま学生に召し使われたもので、その子である世継を大學丸という幼名でよんでいた。彼の生れた場所は太炊御門から北、町尻から西の、その頃は式部卿でいらした光孝天皇の小松御所付近で、九歳の頃、式部卿宮が俄かに帝位に即かることになり、今までヒソソリ閑としていた御所に、太政大臣基経以下の公卿、殿上人たちの伺候の馬・車がひしめき、物見高い京人がガヤガヤ騒いでいるのを目撃したという。なお、この前日二月三日甲午の、最吉日の初午に、父に連れられて伏見稻荷に詣でて、その夜は父のこまごま後見していた禰宜の大夫の宿にとまったとあるから、世継の父は敬神の念のあつい、相当な財産家だったとわかる。また、これより二年前、元慶六年頃、当時式部卿宮の侍従と申していた定省王さだみ、すなわちのちの宇多天皇の鷹狩のお供して、賀茂の堤あたりで、賀茂明神が突然現われ出られて何事か託宣なさるのに出会ったという。長

じて光孝天皇の皇后で宇多天皇の母后なる班子女王に召し使われることになって、二十五六のおとごさかりには、高名の大宅世継といつて、随分世間に知られた男だったという。彼の妻は彼より一廻り十二歳の年上だそうだが、今日は生憎おこりでもなつて来なかつたけれども、今なお健在で、若い頃は文徳天皇の皇后明子に種洗女として仕えていて、権中納言藤原兼輔や左宰相中将良岑衆樹に懸想されたことがあるというから、大したものである。また、私の後見人として兵衛内侍の親を頼み、内侍の許へ度々訪ねたというから、相当地に宮廷や摂関家の内情に通じていたわけである。

また、世継の翁は大の菅公びいきで、道真が太宰府に流されたのに同情して、その詩文の講釈を聴くために、大学生の不遇であるのを訪ねて、手土産・手弁当で通つたというから、ちょっと感慨のある無類の学問好きである。それから何かにつけて、しきりに王威王威ということを言い、あるいは本紀と列伝を別にし、君臣の名分をやかましくいうのも、あるいは内典・外典の一斑を知り、古今の歴史を諳んじているのも、和歌の嗜みがあるのも、歴史上の人物や事件にたいして非凡な洞察眼と批判力をもっているのも、この世継の翁の素姓・経歴を知らなければ肯けることである。

なお、この物語の主要な語り手を「大宅世継」と命じたのは、オホヤケは公家を意味し、ヨツギは代々の歴史をも意味するからで、実に朝廷の御代々の事を語る翁の姓名にふさわしい。また大宅氏は『古事記』や『新撰姓氏録』に見えていて、仮名ではなく、実在している、壬生・春日・葦占・布留・和爾部・樺井・柿本・小野ら諸氏と同祖で、孝昭天皇から出ており、もと屯倉の管理者であつたらしいが、同族に古伝承の管理者が多いから、角川源義氏の説の如く、これを『大鏡』の作者は利用したのであらう。また、世阿弥の『花

伝書』第四の式三番の起原を説いたところに、村上天皇の御宇のこととして、「稻積の翁、代継の翁、父尉この三をさだむ」と記しているのと、『御堂関白記』長和五年十月二十九日庚子の条に「従北野為点地、忌子・稻実翁等度、見物(大嘗宮の点地である)とあるのを、かつて佐藤謙三氏がひいて、稻積翁や稻実翁は農作物の繁栄をことほぐ翁であるらしく、これが道長時代にいたるとすると、世継の翁もいて、祝言を主とする翁舞を演じていたらしいと説かれたことがあるが、そうすると、大宅世継という姓名には、ご歴代の物語をする翁という意味のほかに、大御代の万歳を祝言する翁という意味もあつたと認めてよい。

つぎに夏山繁樹翁は、氏も素姓もよくわからない棄子を、養父が市で買い取つて来たもので、もとの姓は夏山、幼名は大犬丸といつたが、十二三歳の頃、のちの太政大臣貞信公、当時は藏人少将忠平といったのに仕え、繁樹という名をもらつたといつてある。夏山は翁が五月生れであるところから、繁樹はその縁語だが、これも祝福の意をこめた命名である。その時分、二十五六の若さかりの世継の翁に逢つている。延喜・天慶・天曆のご三代のことはよく記憶しており、拾遺編の「雑々物語」では、本編の世継翁の物語にもれた、そのかみの逸話を物語つて大いに活躍している。ことに歌道には嗜好があつたと見え、その方面のことを情熱をもつて語つており、その老妻は後添えだが、手習歌詞に由緒深い奥州安積沼わたりの者で、歌人夫妻の陸奥守信明の室中務の召使となつて上京したものである。しかし、繁樹翁には、その妻を理財の手腕ゆえに棄てたいといつておるような現実的な一面があり、例えば藤原道長について、その政治、とくに法成寺造営にたいしてはかなり批判的・揶揄的であり、これに反して、醍醐天皇の雪の夜に御衣を脱いで、諸国の民百

姓の寒苦を深くご同情あそばされたことを感激をもって物語っている。また世継の翁の記憶のまちがいが訂正しているところもあるが、だいたいにおいて、人の好いお爺さんで世継の翁を先輩扱いにして、その引き立て役で満足しておる。なお、両翁とも夫婦愛がこまやかで、当代の浮華淫靡な貴族の士女のスキャンダルにたいしては、冷徹な批判の目をむけている。

また、この二人の翁の話し相手の若侍は、聞き上手の合槌役で、しかも、なかなか歴史の表裏に通じていて、世継の翁の話を黙って聞いてばかりいず、異説のある場合は一々反駁している。例えば、兼通・兼家の兄弟争いでは、翁が兼家に肩をもつのを、若侍は兼通に理ありとし、小一条院退位事件については、翁は故民部卿元方の怨霊の祟りだという風聞を伝えると、若侍は道長の奸計だという秘話を述べるがごときである。それで、はじめは「年はたちばかりのなま待めきたる者」にすぎなかったこの男が、末には世継の翁をしてその才学のほどをほとほと感心させ、すっかり殿扱い・学者扱いを受けしめるにいたっている。ただ、その素姓が祖父が兼通に年来昵懇な者だったというだけで、院・宮・撰関家、いずれの侍かかわらないのが残念である。

最後に作者自身については、三条院の皇后で、一品宮禎子内親王の母后である皇太后姘子に由縁あるものと知られるだけで、ほかは分らないが、この一品宮が後朱雀天皇の皇后となられ、後三条天皇を降誕され、これが撰関政治に終止符をうち、天皇親政から院政が開始されるのだから、さきの世継の翁の素姓・履歴とともに、この書が院政者流の史観によって著作されていることが明らかである。また、これらの翁・姫・若侍および聴衆の道俗男女が、庶民階級、あるいはそれに近い下層階級の者であることは、彼らが撰関政

治から院政政治へ、荘園経済から封建経済への転換期の指導勢力であったことから妥当で、ここらにも『大鏡』の著者の燃犀で非凡な史観が窺えるように思う。

### 九、『大鏡』の構成及び文学的価値

——書名・作者・著作年代——

ところで、この物語の構成は「序」で世継翁が、御堂関白道長がこの話の主人公で、彼を物語れば世の中のことを皆わかるのだが、ちょうど仏が『法華経』を説くために爾前の余経を説いたように、その祖先から話さないと、入道殿の権勢の由来はわからぬといって、本文に入り、まず、冬嗣女所生の文徳天皇から今上（後一条天皇）まで十四代の天皇本紀をざっと述べ、つぎに左大臣冬嗣から道長まで撰関大臣二十人の列伝を順次に精叙し、更に道長伝中の「藤氏物語」の中で、こんどは藤原氏の始祖に溯って、大織冠鎌足からの歴史を補説し、最後に「雑々物語」として、以上に洩れた逸聞や、寺社の縁起や、源氏のことや、芸術談に花が咲く。その中に今日の法会の講師が来て話が中断されたというので、大団円になっている。その史料は公私の記録や種々の文学的文献のほか、旧家・古老の伝承にえたものが多く、当時の政治の機微にふれている。なお、流布本には、「後日物語」がついていて、作者が年老いてのち、ちょうど雲林院の菩提講から八十三年目の鳥羽天皇の元永二年己亥（二二〇）のとしに、ある所の千日講に参詣したら、そのかみ二十歳であったらしいの若侍が百歳あまりになり、同じく菩提講で世継の翁の長広舌に聞きはれていた道俗男女の一人であった老僧と出会い、この老僧の乞いによって、自分がその後世継の翁と再会した折の話や、あるいは自分の経験した八十三年間の事柄を物語るのであるが、主題は、



世継の翁が夢に見たという、れいの一品宮のご将来の栄花が上東門院と同じだという予言についてであるが、それも後一条天皇の崩御から後朱雀院の御代までで、本題に入らず、かえって頼通が嬪子女王を後朱雀院の後宮に納めたので、禎子皇后が逆境でおられるところで筆をとめ、結局尻切れ蜻蛉に終っている。従って蛇足は蛇足だが、この二の舞の翁の話のつまらなさによって、世継の翁の物語の偉大さを知ることができるのは皮肉である。

このように『大鏡』の正編は、帝王物語（本紀）と大臣物語（列伝）と雑々物語（書または志）から成っているが、これは中国の正史の紀伝体をまなんだものであることは、先哲のいうとおりであろう。しかし、この長物語が主として世継の翁一人で語られているのは、すでに説いたように、わが旧辞の伝統をうけているからで、まづ人々の系譜を述べ、その伝記や逸話に及んでゆく語り口は、『古事記』が帝皇日継と先代旧辞を統合したのに似ている。殊にその国の歴史を国語で叙し、その時代の歴史を時代語で述べるといふ『古事記』魂を復活させたことは偉大な功績だと思ふ。先行の『栄花物語』も国語で時代の歴史を写しているが、平安盛期の優美一方の宮廷女性語で、それに適する方面だけを記述しているのは、視野が狭く、いかにも物足らぬ。ところが、『大鏡』はその話し手が庶民、あるいは下層貴族の連中で、こういう手が大胆・無遠慮にそれぞれ持ち前の言葉で、撰閲社会の表裏や、貴賤の生活や、当代の人物の性格をスッパクのだが、それぞれの人物の言葉は、いかにもその人物のその場合らしく表現されていて、描写を躍動させている。更に繰返すが、『大鏡』がプラトンの問答体の劇的様式で、ダイアレクティクな歴史叙述及び批判をしているのは、『栄花物語』はもちろんで、『古事記』以上に出了ところで、読者の歓迎をうけ、早

速その体裁に模して後日物語が作られ、爾後『今鏡』『水鏡』『増鏡』など、いわゆる鏡物と称する歴史物語が簇出したのも不思議ではない。ただ、これらの歴史物語が、いずれも『大鏡』の古老の物語という旧辞伝承形式の復活の点だけ継承して、問答文学的なダイアレクティクな歴史記述、性格的・行動的な人物描写および批判を喪失したの遺徳ではあるが。——しかし、この歴史批判の精神は、『愚管抄』『神皇正統記』『梅松論』『読史余論』に伝えられ、また、その劇の様式は『宝物集』『無名草子』『野守鏡』らの宗教・物語・和歌の評論文学によりピビッドにもちいられている。『大鏡』は、これら国語でものされた歴史・評論文学の権輿としても、永遠の光をはなっている。

ところで『大鏡』という書名は、平安末期の藤原伊行の『源氏積』、また『今鏡』の序、『水鏡』の跋にその存在が知られるが、そのほかに、『世継大鏡』『世継物語』ともよばれていた。一方『栄花物語』も成立まもなくから「世継」、または「世継物語」とよばれていた証があり、当時一般に仮名の国史をそうよんでいたと思われる。しかし、『大鏡』の作者は、「帝王物語」の跋の閑語によると、「古鏡」とよびたかつたらしく、世継の翁は「すべらぎのあとつぎつぎかくれなくあらたに見ゆるふる鏡かも」と詠んでいる。『大鏡』の名義は、関根正直博士によると、『水鏡』の跋にいう「大円鏡智」から来たらしく、『心地観経』等の「如大円鏡現衆色像」「能現衆生善惡業、以法因縁、名為大円鏡智云々」とあるのでよくわかる。けだし、仏徒の命名であろうが、はなはだ適切な書名として一般に行なわれた。

『大鏡』の作者及び成立年代については、種々の説があるが、その「後日物語」の端書に「皇后宮大夫殿書きつがれたる夢なり」とあ